

記憶を未来へ

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

今年の人権週間(11月29日～12月10日)の前に、富坂キリスト教センターより『日韓キリスト教関係史資料集Ⅲ』という分厚い本を送って頂きました。包みを解いてみると、この本の上梓に主役をつとめた井田泉司祭からの贈呈でした。早速、本を開いて見て、なぜこの本が私に贈られたのかが分かりました。

既刊のⅠ、Ⅱ巻に続いて、このⅢ巻では1945年から2010年までの日韓キリスト教の関係を示す貴重な資料が収録されています。特に第2部「韓国民民主化闘争と日韓連帯の動き」には、60～80年代の諸活動が生々しく記されています。2部の後半に「ここに収めたものは大韓聖公会関係の資料である。1から18(6,7を除く)までは新聞や雑誌に掲載されたものではなく、現場で発行された原資料である。これらは日本聖公会日韓協働委員会によって翻訳され、日本聖公会の諸教会に配布された」(981頁)とあり、聖公会日韓協働委員会の発足メンバーの井田司祭の調査と収集の労もあって、40ページほど大韓聖公会の記録も掲載されています。

私は、ここで若き頃の自分を見つけました。索引に5回も自分の名前が載っており、驚きました。自分のことはさておいて、これだけ当時の日本聖公会の皆様は韓国に聖公会の試練や苦勞が紹介され、祈られ、支えられていたことを、改めて確かめることができました。この場を借りて改めて感謝を表します。

私の名前が出ていたのは、先ず、1982年5月26日にソウル教区正義実践司祭団が発表した「光州事態追悼礼拝拘束事件に対するわれわれの立場」という声明文です。「信仰的な立場から行った説教者と祈祷者を拘束し、さらに純真な意図で単に行事に参加していた年若い柳時京君と白恵鎮さん(以上ソウル大聖堂所属信徒)を毅然としない事由で拘束した処置は、当局がいかなる目的でなしたのか納得することができない。報道によれば、上記二名の青年が光州追悼礼拝後、扇動してデモを誘発したというのが、われわれの調査によれば全く事実無根であることが明らかになった」(982頁)。

この真相はこうであります。当時神学部一年生だった私は、5月の中間テスト期間中の試験の無い日に光州で開催される5・18光州事件2周年犠牲者追悼礼拝に参加するため、18日に日帰りの予定で光州に向かいました。警察に二重三重に囲まれての礼拝を終えて、次の集会に向かう途中、私は不審検問に引っかかり、よそ者であることやカバンの中に不穏な内容のチラシを沢山所持した理由で即座に検挙・連行され、ついに刑務所に入れられました。日帰りの旅行は長旅となり、中間テストは受けられませんでした。家や学校、教会への連絡すら許されず、なすすべもなく、思想犯扱いで軍事裁判を受ける羽目に陥っていました。

牢屋では酷い扱いを受け、軍事独裁の厳しい現実を、身をもって感じる日々でした。自害防止のためメガネも押収され、聖書以外は一切の本も許されませんでした。独房の牢屋は便所も一緒に、長細い部屋の一方には鉄扉に給食用の穴が、反対側には高めに小さな窓がついていました。ご飯と運動の時間を除いて正座が基本で、消灯後は中々眠れない夜を迎える日々の連続でした。幸い、一緒に検挙された白さんの親戚が当地の軍法務官として来ていて、学校への電話を許して頂き、検挙から数日後にようやく連絡が取れました。そこから釈放運動が始まり、釈放を求めるソウル大聖堂の合同礼拝に 500 人が集い、礼拝後に先の声明が発表されたのでした。結果として、検挙から1か月後の6月初旬に、起訴猶予で釈放され帰宅できました。

20 歳の時のこの経験は、以降、私が人権について学びながら、人権委員会などに携わるきっかけとなりました。自分は教会のサポートを受けて不本意な裁判を免れましたが、それから随分長らく独裁政権による不法逮捕や拘束が続いたのです。獄中で「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」(マタイ 10:28) というみ言葉に励まされたことを思い出しながら、記憶を未来へつなぐことを大切にしようと心を決めました。